

ダンス作品における言葉

稲田奈緒美

【研究目的】

ダンスが芸術作品として、独立して上演されるようになって以来、言葉は作品から排除されてきた。例えば、現在まで伝えられている古典バレエの諸作品では、言葉の代わりにマイムが用いられ、パそのものが舞踊言語とみなされている。だが、近年、ダンス作品に言葉が登場するケースが増えてきた。そして今や、ダンス作品に言葉を挿入することは、一種の流行、スタイルにすぎなくなってしまったかのようである。そのため言葉はかつて登場したばかりのころの新鮮さ、衝撃力、異質性を失いつつある。そこで、ダンス作品における言葉の働きを分析、検証することで、ダンスと言葉のスリリングな関係を取り戻す一助となることが、本論の目的である。

【方 法】

まず始めに、ダンスを語る際に、しばしば比喩として用いられる、「舞踊言語」「身体が語る言葉」「ダンスの語彙」等々の、ダンスの構造、機能を言語・言葉のようにみなすことを自明とする言説と、本論での「言葉」との違いを明確にした。ダンスと言葉の関係において、親密性、類似性を前提とするよりも、異なるものとして距離をおいた位置から始める方が、考察が深められると考えるゆえんである。

分析の対象としたのは、ここ数年間に、主として東京で上演されたモダン・バレエ、モダン・ダンス、コンテンポラリーダンス等である。ここでは、ジャンル分けは必要ないであろう。

言葉の用い方による分類は、以下のようにした。

- (1) ダンサーが発する「声」；身体の延長としての「声」
- (2) ダンサーが発する「言葉」；意味を伝える記号、道具としての「言葉」
- (3) 歌詞、詩の朗読など、背景の音、音楽としての「言葉」
- (4) ノイズとして乱発される「言葉」。言葉の意味は曖昧、または識別不可能

これらを、作品を受容する観客から分類すると、以下のようになるであろう。

- (a) ダンスを補足する「言葉」；ダンスだけでは語りきれないことを、言葉によって説明し、補う。
- (b) 意味の伝達ではなく、アトモスフィアを形成する「言葉」；ミュージック・コンクレート風、音楽の代用品

(c) ダンサー（の身体）への視線、まなごしをそらす「言葉」

これらの中で、特に重要と思われるのは(c)であり、ピナ・バウシュの作品が該当する。バウシュ作品での「言葉」の表現性、特異性を明らかにするために、(a)、(b)の分析から始め、比較する。

(a)に該当する代表は、モーリス・ベジャールの作品であるが、これは、ベジャールが言葉を取り込むことで、全体演劇を目指したことから説明されよう。この全体演劇への試みは、同時代の演劇が、従来の言葉中心主義を捨て、肉体に接近し、肉体表現を重視する運動を進めたことと表裏をなす。しかしここでは、「言葉」はまだ、ダンサーが演じる役の台詞のようであり、従来通りの一義的な意味を伝えるものである。

(b)については、「言葉」の意味を伝えることは、重視されていない、または目的ではない。ダンサーが発する場合は、身体の延長としての「声」としての機能が強く、スピーカー等から発される場合は、音楽としての働きが主であろう。

そして(c)について、「言葉」は多義的である。シンプルで、一見たわいない「言葉」は、作品のコンテクストによって意味を変化させ、様々なジェンダーを背負った主体としてのダンサーが発することで、新しい意味が発生する。ここではもはや、ダンサーはまなごしを浴びるだけの存在ではない。また、ノンバーバルのダンスの動きを、積極的に受容、解釈しようと務めていた観客が、既成のシステムである言葉を耳にしたとたんに、そのシステムに引き込まれてしまうことをもあらわにする。このようにして、観客のまなごしはゆらぎ、そらされる。

【まとめ】

これからのダンス作品では、観客は従来の視覚優先による受容方法の変更を迫られるだろう。その視覚とは、極めて近代的で支配的な視覚、まなごしである。そのように、観客に態度変更を迫る作品において、ダンスと言葉は緊張関係を保ちながら、互いに新しい可能性を広げていくことができるであろう。

【参考文献】

- Ramsay Burt (1995) "The Male Dancer Bodies, Spectacle, Sexualities" Routledge London
エリザベス・デンプスター「身体の再視覚化—フェミニズムと新しい舞踊」JADE93発表論文集
中村雄二郎 (1993)「表現する生命」青土社
多木浩二 (1996)「思想の舞台」新書館
丸山圭三郎 (1994)「言葉とは何か」夏目書房